

〔論文〕

存在と量の否定の表現について

宝 島 格・今 仁 生 美

名古屋学院大学商学部 / 外国語学部

要 旨

本論文では、否定表現において存在や量に関わる場合の容認可能性について、特に否定の「スコープが広い」とされる場合に量と共起しにくい理由を論じた。容認可能性がそもそも「ある状況でそのような表現が表出されるか」に立脚していることから、そうした状況で発話がどのような目的をもってなされるかが関わっているものと考えられる。文の構成要素を機械的に組み合わせることによって文を作り上げることはできるが、人間の本来的な認識の方向は、そのような文を解釈することに向けられているのではなく、自らが表出したい内容に従って文を構成するという手順を踏むのであって、従って「分析的に」文を解釈することができる場合でも、自らが発話することのない文には「不自然さ」を感じられるのであることを論じた。この観点から、量に限らず「…しなかった」という部分否定文の系統の一部の容認不可能性も説明が可能であるものと考えられる。

キーワード：否定表現，量，容認可能性，産生的，分析的

On negation of existence and numerals

Itaru TAKARAJIMA, Ikumi IMANI

Faculty of Commerce / Faculty of Foreign Studies
Nagoya Gakuin University

発行日 2023年3月31日

はじめに

否定表現については、いろいろな文要素について、それと組み合わせた場合に容認可能性が落ちることが指摘されている。特に量の表現と組み合わせた場合に、何らかの特殊な状況と組み合わせる、あるいは否定のスコープを狭く限定する、などという留保つきでないと容認不可能になることが良く見られる。こうした現象についてはいろいろな説明が試みられてきているが、必ずしも完全に納得のいく解決が得られているとは言えない。英語にも同様の現象が見られ、例えば Solt and Waldon (2019) はその現象を「凸性 (convexity)¹⁾」という観点から簡潔にまとめることができるとしているが、ある文が容認不可能である「理由」としては必ずしも得心のいくものとは思われない。つまり、主観的に「容認不可能」と思われる例に出会った際に、「なぜ」それが不自然であると感じるのかについては、感じている主体である我々自身がそれとなく分かってはいるものの、明文化しての説明が今ひとつできない、というもどかしさを解消してくれるような説明が欲せられているのである。

本論文で特に取り上げる典型的な文は

(1a) (我が家の鶏の) ドナルドが卵を2個産んだ。

(1b) ? (我が家の鶏の) ドナルドが卵を2個産まなかった。

のような文である。肯定の(1a)は全く問題ないが、(1b)はそうではない(今仁(2010, 2023))。(1b)は特定の状況で特定の内容を述べたと考える場合には容認可能となることもあるが、一般的な状況でいきなりこれが発話される場合には容認不可能であるのが普通と考えられる。このように量の表現「2個」は否定の「ない」と共起することが難しい。上記の Solt and Waldon (2019) では量の範囲として「2以外」は「0, 1, 3, 4, …」という範囲であり、この範囲は凸 (convex) ではないというまとめ方をしているが、それではなぜ凸でないと容認できないのかは納得がいくようには思えない。

もちろん容認可能性を判定する主体としての我々自身には「容認不可能なのは当たり前である」と感じられるのであり、問題は他の言語学的知見に整合的にその理由を述べるというところにあるように思われる。本論文ではこれについて、理由は端的に当然なものなのであって、その当然さを理由として認めるべきであると主張したい。人間の自然言語は特に「構成的」で「無限の表現が可能となる」ことが、他の動物のコミュニケーション方法とは異なる大きな特徴となっていると思われるが、必ずしもこうした構成は無制限に行われるものではない、というのがその主眼である。もちろん文法的・意味論的に構成は制約を受けることが当然指摘され、それについてこ

1) 一般に、図形が凸であるとは、その図形内の任意の2点を結ぶ直線が全てその図形内に含まれることを言い、直線上に配置された図形の凸性は、端的には途中で途切れがないことと同じである。上記の説明では離散的な数の連続にそのような意味合いを援用して用いている。

れまで知見が積み重ねられてきたが、ここでは更に「2個」と「産ま」と「なかった」という要素が組み合わせられることも、単純に「できない」と主張したいのである。もちろん言語についての知識を持つ人間は、各要素を組み合わせ文を構成した際に、各要素の意味が組み合わせられて全体の文の意味が定まる、という知識も持っていると考えられる。そのような「分析的」な見方をするならば、確かに(1b)のような文の意味は定まると言える。しかし容認可能性は「自然に聞いたときに感じる違和感」が問題なのであって、言語的知識に基づいて機械的に構成した文を「分析的」に捉えるのとは判断基準が異なるのが当然であろう。従って発話を「分析的な気分で聞く」と「自然に聞く」とは区別する必要があると思われる。

著者らは自然言語の扱いについて一貫して、言語に対する我々自身の反応の仕方を計算機に再現させるという立場から考察を加えてきた(宝島・今仁(2002, 2003, 2007a, 2007b, 2009, 2012, 2013a, 2013b, 2016, 2017, 2021))。そこで取り上げてきたことにはもちろん文の容認可能性も含まれているが、当面手を付ける課題としては「発話を聞き、その意味を把握し、知識に加える」というところを中心としてきた。今回は「自ら発話する」という観点が主となるので、実際の計算機への実装という観点からはまだ先の課題ということになる。

本論文ではこうした立場に立って、特に量と否定、それが含まれる文の容認可能性について考えたい。

そのために用いる方法は専ら著者らの内省によるものであり、ある表現の使用可否やその表現の含むニュアンスとして述べているものは、著者ら自身のものである。その細かい内容は人によって異なるであろうし、著者ら二人においても意見を異にするものもあり、更には各人においても判断は刻々と揺れる。それでもこうした表現において、発話状況の限定や、話し手の意図の明確化によって少なくとも大筋において同意できそうな結果を得ることができるように思われる。

1. 分析的発話と産生的発話

個数が述べられていなくとも、(1a)や(1b)と同様の状況が観察される。次の文

- (2a) ドナルドがこの卵を産んだ。
- (2b) ?ドナルドが(は)この卵を産まなかった。
- (2c) この卵はドナルドが産んだの(産んだもの)ではない。

において、肯定の(2a)はもちろん自然な文であるが、(2b)はかなり不自然である。その述べようとしている内容は、自然には(2c)のように述べられる。

(2c)はこの状況「卵e, eを産んだ主体x, $x \neq$ ドナルド」について、「ここにあるこの卵について、その属性を述べる。誰が産んだ卵かと言えば、(誰かが産んだものであるはずだが)それはドナルドではない。」と分析的に述べようとしている文である。このように「既に存在している事物について、その属性を説明する」気持ちで行われる発話を「分析的発話」と呼ぶことにしたい。

一方で、発話はこのような、状況について冷静に、俯瞰的に分析するものだけではなく、むしろ普通の文は何らかの事態の発生に応じて発話されるものと思われる。こうした事態は、何もない基盤的な状況の中に、突然（偶然的に）発生する。例えば「卵を産む」ような動作は、時間の流れの中では、通常は基本的には見られない。それがある時点で、突然に（偶然的に）発生する。そのとき我々は「卵を産んだ」と表現するのである。このような動作（イベント）の発生に応じてなされる発話を「産生的発話」と呼ぶことにしたい。

産生的発話では否定と肯定の著しい違いが見られる。つまり、「産む」動作について言えば、「ある瞬間を捉えたとき」の常態は「産まない」であり、それを「産まない」と発話することはない。Imani（2023）ではこうした状況を“trivially true”（空虚な、自明な真）と呼んでいるが、「産む」の「否定動作」は通常当然成り立つのであって、自然な産生的発話でこの状況について述べることはない。従って肯定の「産んだ」とは異なり、「産まなかった」という表現は、「その瞬間のイベント（不産卵）の発生」とは別の意味で用いられることになる（後述）。

分析的発話の典型的な形は「…のである」「…のではない」のような形であろう。産生的に発話しようとしていると見なせそうな（2a）や（2b）に対して、

（2d）（？） ドナルドがこの卵を産んだのである。

（2e） ドナルドがこの卵を産んだのではない。

のような形を取るなら、それは分析的発話と考えられよう。但し、（2d）のような文は無理にこの形に当てはめたために、特にその効果を意図したと考える限り容認可能性は低くなると思われる。肯定文では産生的発話を分析的発話として用いることも可能であり、分析的に発話する際にも（2d）ではなく（2a）を用いることが普通と思われる²⁾。このため肯定文では違いが不明瞭であるが、否定文では明瞭な違いが見られる。上記の（2b）は産生的発話として見たときに自然な発話に失敗していると考えられ、分析的に（2e）または（2c）のように発話すべきであると考えられるが、逆に産生的発話になるのが自然な状況では分析的発話が失敗することになる。宝島（2014）では様々な例を検討しているが、次の例

（3）（Aが買い物に行ったBのことを心配している：この旅行で、手持ちの現金が少なくなってきたから、現金じゃなくてなるべくカードで支払おう、とこの前も確認し合ったのだが、どうもそういうことをBは忘れてしまうから心配だ…。そしてBが帰ってきた）

A お帰り。お前、現金使わないでちゃんとカードで買って来たらうな？

（3a） B え？…あっしまった！この時計はカードで（は）買わなかった。

（3b）* B え？…あっしまった！この時計はカードで買ったのではない。

2) あるいは（2f）この卵はドナルドが産んだ。

においては、発話の状況が「分析的に述べる」ことを許さないために、分析的に理由などを述べようとしているかのような(3b)は容認不可能となっている。なおこの(3a)では「カードで買う」の否定の動作「カードで買わない」が生じたことを産生的に述べていると見ることができよう。このようなかなり限定された文脈では「否定の動作」が「生起する」とも考えられる³⁾。

このように、産生的発話と分析的発話は、話者の内心のありように基づく区別であるが、表現や容認可能性にそれなりに明瞭な違いが確かに見られるものと考えられる。

2. 否定と動作の不存在

産生的発話は「基本的に何も生起しない基盤的状况の中に、突然偶然的に何かの動作・イベントが生起した際に、その生起を述べる」ものであり、従ってそれは通常は肯定形であることになる。一方の否定文の表す内容はどのようなものであるか。例えば

(4a) ドナルドは今日、卵を産んだ。

(4b) ドナルドは今日、卵を産まなかった。

において、(4b)の意味する内容は「対象範囲内における該当の動作の生起の個数(回数)が0である」と考えられる。(4a)は「対象範囲内のある場面(時点)で突然偶然的に動作が生起した」ことを意味している。肯定と否定は著しく異なり、否定の(4b)は対象範囲である「今日」の全ての瞬間を確認した結果を述べていることになる⁴⁾。

従ってこの(4b)は意味内容的には産生的とも分析的とも考えられると言えるが、ここでは産生的発話と捉えておくこととしたい。

このように、産生的な肯定文「産んだ」に対応する否定文「産まなかった」は、「動作の否定である不産卵という動作」が「1回以上存在」ということではなく、別の意味「産卵という動作が0回」を述べることになる。

従って、当然ながら

3) 但し、より自然なのは

(3c) B え?…あっしまった!(この時計を買うときに)カードを(は)使わなかった。

である。これも「カード不使用」という「否定の動作」の「生起」と見ることも可能であるが、「カード使用」の「不生起」がより自然と思われる。

4) もちろん論理式的に書くならば(4a)は「 $\exists$ 瞬間(その瞬間には 産む)」であり、(4b)は「 $\forall$ 瞬間(その瞬間には $\neg$ 産む)」となって、(4b)が確かに(4a)の論理的な否定であることが分かる。

(5a) ? ドナルドは今日、卵を2回産まなかった。

のような文は産出されえない。「産まなかった」は「0回」を意味するのであり、「2回」に言及しようとする話者がいるはずはないのである^{5) 6)}。

3. 産生的発話の過程と否定

ここでは産生的発話において話者の内心ではどのような過程が進行しているかについて考えてい。 (1a) (1b) を再掲するが

(6a) ドナルドが卵を2個産んだ。

(6b) ? ドナルドが卵を2個産まなかった。

の (6a) において、話者の認識は次のような段階を踏んでいるのではないか。

(6c) ドナルドが産卵 → 卵が存在 → 卵はどの卵? 何個? → 2個

まず「基本的に動作が不存在」の時間の流れの中に突然偶然的に動作「産卵」が生起する。それに気づいた話者は動作の存在と、それに伴って生じた事物「卵」を認識する。そうすると物体「卵」

-
- 5) 但し回数を厳格にカウントせずに「0回と言っても大勢に影響がないくらいに少数」であることを「産まなかったも同然」という意味で「産まなかった」と述べるのが慣例となっているような文脈であれば、より厳格に回数に注意を払うつもりで「1回も」を用いることもありうる。つまり

(5b) ドナルドは今日、卵を1回も産まなかった。

では「カウントの仕方を厳格にしても、それでも否定が成り立つ」ということを述べているのであり、発話可能である。これでも「2回」は不自然であるが、更に限定された文脈で

(5c) あいつは1日にシュート練習を10本もしないんだよ。なのにあんなに入る。

※シュート1本にかかる時間は10秒ほどで、1日の練習量としては10本は極めて少ない。

のような状況では、上限回数が「1」ではなくとも発話が可能である。

- 6) つまり、「産まなかった」のであれば0回であり、もし特殊な文脈で「産まない」をひとまとまりの動作としてその生起回数を問題にするのなら2回「産まない」という事態は通常はImani (2023) で言う “trivially true” であって発話されることはなく (例外的状況はImani (2023) を参照), またもし「2回産む」をひとまとまりの動作と考えるのであれば、発話は可能であるが、それは次節に述べるように「到達目標」的な文脈であることによって「2回到達しなかった」ことを意味することになる。

がどの特定の卵であるかを認識することになり、更には個数が知りたくなり、個数を確認することができればそれが判明する。これが時系列的に心内で生じているということではないが、前段階は後段階の前提となっている。

こうした動作・イベントは、我々生物にとって生存に影響を与えるかもしれないのであり、その情報を得ようとすることは生物の自然な行為である。そのイベントの詳細を知ることは生物のその後の行動・判断に影響を及ぼし、情報が多いほど生存に有利になるであろう。特にその際問題になるのが個数であれば、「個数がある数より小さいか大きいかが」興味の焦点となろうし、「大きな数の生起」には「小さな数の生起」は含まれる。大きな個数が存在すれば、必要個数が小さな数である場合には一部を用いればよいからである。3個の卵が必要な場合に、5個産んでいれば十分である。非常に限定された文脈でない限り、例えば「奇数個産んだ」か否かが問題になることはなく、従って「奇数個ではない」を自然に発話することは考ええない。動作の結果として生じた物体でなく、動作の回数についても同様で、5回転べば3回転んだことにはなる。

このため特に「到達目標」のような個数・回数があり、そのラインをクリアすることが話者の生存等に大きく影響するような状況では、その個数・回数が強く意識され、個数・回数と否定「ない」の組み合わせが生じうる。Donaldがいつもは毎日2個以上の卵を産んでおり、2個が確保されることが話者の生存上大きな影響を与えるような文脈では

(6d) ? Donaldが今日は卵を2個産ま（産んでくれ）なかった。

という落胆の発話がありうる。これが条件節に入るとより明瞭になり

(6e) この部品を期限までに10個納入しなければ、契約を解除される。

のようにごく普通に発話されうる。これは「10個納入する」という「個数・回数と動作のセット」が「(目標を) 完遂する」という一つの動作と認識されていると考えられる。(但し単発の動作「納入」の「積み重ねが10個に到達する」ということを指しており、必ずしも「10個連続で納入動作が生じる」ということではない。) これを否定するのは単に「完遂動作」が生起しなかったということ述べているだけであり、自然に産出されうる。もちろんこの際の「到達目標」は「目標以上の個数・回数」であればクリアできるのが大半であって、我々の感じる容認可能性もそれに従う。大きな数には小さな数は含まれるので、自然な文には数の大小に起因する制約が生じ、

(6f) この部品を期限までに10個以上納入しなければ、契約を解除される。

(6g) * この部品を期限までに10個以下納入しなければ、契約を解除される。

の(6g)のように「到達目標」として設定不能な個数の言及は容認不可能となる。

こうした「到達目標」のような前提がない、全くフラットな状況での発話については、個数・

回数が0であるならば、そこに「何個なのか」「どの卵なのか」が入りこむ余地はない。従って(6b)のような文が産出されないことは明らかである。産まなかったのであればそれは0個であり、産んだのであれば何個産んだかを言うことができるが、個数を言うのであればその個数、少なくとも確認された個数を言うのであって、個数が「2でない」と言うのは極めて不自然である⁷⁾。

結局、人間の事態に対する認識の仕方がこのようであるからには、「ない」が動作の不存在を表すことが自然であり、その場合に個数・回数は0となり、(到達目標などでない限り)それ以外の数との結合は生まれないということになる。

4. 対象の顕在化と存在論的制約

上記と同様なメカニズムが、(2a) (2b) にも見られる。再掲すると

(7a) ドナルドがこの卵を産んだ。

(7b) ?ドナルドが(は) この卵を産まなかった。

の(7a)において、話者の内心で進行する過程は

(7c) ドナルドが産卵 → 卵が存在 → 卵はどの卵?何個? → この卵

となろう。「この卵」は例えば既に手元にある卵として認識され、個体としての他の物体とは区別された自己同一性は認められているものの、「ドナルドが産卵する」という動作・事態との関係はこの内心での過程に依拠している。産卵の動作が生起しなかったならば、その存在していない「産卵」によって存在が生じるはずの「卵」と、手元の「この卵」には、一切の関係がなく、自然な産生的発話で「この卵」が登場する余地はないものと考えられる。つまり、ごく自然に(7b)のような文を発話する際には

(7c) ドナルドは卵を産まなかった。

7) もちろん非常に限定された文脈で、「2個か否か」が特に意識されて、「卵を産み、その個数がちょうど2個であるように産む」という動作が一つのまとまりであると強く感じられる際には、この文も産出されうるため、その気持ちで聞けばこれも容認されうる。もし「2個産む」という「2個」と「産む」動作を結合して一つの動作とし、例えば「双産する」などの語で表現する人々がいるならば、

(6e) ドナルドが今日は卵を双産しなかった。

は特に問題なく受け入れられる文と考えられる。元の(1b)については、そうした強い結合が意識されていない限りは難しいことになる。

でしかないものであり、そこに無関係の「この卵」が入りこむことはできない。「この卵」とドナルドの関係を分析的に述べようとするならば、明らかに分析的な表現の仕方をを用いて、(2c)の再掲であるが

(7d) この卵はドナルドが産んだの（産んだもの）ではない。

のように述べるしかないということになる。但し、(7b)を分析的発話であると捉え、文法的な結合の仕方に基づいて、(7d)と同じ意味内容を表すと解釈することは、もちろんできる。我々人間の多くは文法的知識を持っており、それに基づいてなんとか話者の意図を汲み取ろうとすることができるからである。しかしそれはやはり自然な文とは思われないのであって、容認可能性は落ちるのである。

このように、文の要素として「産んだ」「ない」「この卵（あるいは2個）」というものを、通常の文法として結合して文を構成することはできるものの、現実には人間の産出する文はより強い制約に縛られており、これらの要素が結合した文を産生的場面で自然に産出することはない、ということになる。こうした制約を「存在論的制約」と呼びたい。自然な産生的発話では文法的な制約に加えて、存在論的制約が表現を縛るのである。（一方で分析的に述べる際には、特に「…ではない」のような様々な複雑な表現を駆使して、なんとか意図する意味内容を伝えることはできるであろう。）

容認可能性は「聞いたことがあるか」「何らかの状況で、自分がそれを発話すると思えるか」によって測られると考えられる。結局、(6b)(7b)のような文は産出される自然な状況が（特別に限定された文脈を除き）想像できないのであって、自然な文としては容認できないということになる⁸⁾。

存在論的制約の見られる別の例を挙げる。久野（1983）の変種である次のような文

-
- 8) もし「この卵」とドナルドの動作が存在論的な制約を受けないような関係にあれば、産生的な文を発話することが可能である。

(7e) ドナルドはこの卵を踏みつけなかった。

においては、踏みつける動作と卵の存在は無関係で、この卵は動作の有無に依存せずに存在している。踏みつけ動作の生起しうる場面において卵は既に存在しているのであるから、話者の内心の過程は

(7f) ドナルドとこの卵、踏みつけるかどうか → 踏みつけ回数は0回

であるにすぎない。

- (8a) この写真はロンドンで撮った。
(8b) ?この写真はロンドンでは撮らなかった。
(8c) この写真はロンドンで撮ったのではない。

についてはImani (2020), 宝島 (2014) でも取り上げたが, これも動作「撮影」が生起して初めて物体「写真」の存在が生じる。

- (8d) 写真をロンドンで撮る → 写真が存在 → どの写真? → この写真

という過程を経ているが, この例の場合「ロンドンで」という「撮影地」が, 写真の自己同一性, つまり「この写真がこの写真であるためには譲れない性質」の一つであると感じられていると思われる。従って, 「この写真」がロンドンで撮ったものでないのなら, 「ロンドンで撮った (かもしれない) 写真」はこの写真とは一切関係がない。そのため「この写真」が (8b) のような自然に発せられた産生的発話に登場することはできないと考えられる。これももちろん「あえて分析的に解釈する」ことはできるので, (8c) と同じ意味を表すと捉えられなくはないが, 自然な発話ではない。

しかし同様な例でも対象 (写真) の自己同一性に影響しない文要素であれば, 自然な文ができる。例えば撮影地ではなく, カメラの撮影モードのような付随的な性質であれば

- (9a) この写真は夜景モードで撮った。
(9b) この写真は夜景モードで (は) 撮らなかった。(昼景モードで撮った。)

の (9b) のように, 自然な発話が可能と考えられる。この場合には昼景モードであろうが夜景モードであろうが「この写真」には違いない (と認識されている) ので,

- (9c) 写真を撮る → それがこの写真 → 撮り方は夜景モードではない

を (9b) のように述べることができる (文の形は否定形であるが, 撮影動作の存在は (9b) では大前提とされていると読むことができる)。

結局, (8b) と (9b) の違いは

- (8e) 写真を撮る (パリで) → 写真が存在 → それがこの写真で, パリで撮ったことは「この」写真であることと不可分な性質 (ロンドンで撮ったか否かは問題にしない)
(9d) 写真を撮る (昼景モードで) → 写真が存在 → それがこの写真で, 撮影モードは気にしない (夜景モードで撮ったのだとしてもこの写真であることは変わらない)

ということになる。このように存在論的制約が影響するか否かは、ある性質が問題の対象の存在に関与していると認識されているか否かに依存している。

存在論的制約は、「産卵」と「卵」や、「撮影」と「写真」のように、そもそも動作によって存在が生じるという関係について述べているが、実際には「存在が生じるか」だけではなく、存在自体には影響がなくとも、自然な産生的発話の場面との「関係が生じるか」即ちその発話での「対象としての地位に上って来るか」という面でも制約を発揮するものと思われる。久野（1983）の例

(10a) この時計はロンドンで買った。

(10b) ?この時計はロンドンで（は）買わなかった。

では、「この時計」は「買った」結果この世に存在することになったのではない点は卵を産むのとは異なる。しかし、「買った」結果としてこうした話題に上るという過程を経ていると感じが自然であり、「買わなかった」ならばその動作は「この時計」とは一切関係がない。つまり

(10c) 時計をロンドンで買う → 時計が話の対象となる → それはこの時計

という過程を経てこそ (10a) の発話が可能となるのであり、「買わなかった」(10b) では「この時計」は一切言及できないのだと考えられる。従ってこの事態を述べるには分析的に

(10d) この時計はロンドンで買ったの（買ったもの）ではない。

と述べなければならない。

これは「買わなかった」と「その物体」との関係が存在に影響しないような場合であれば、容認可能な表現として用いることができる。

(10e) このA君（某アイドル）の応援ウチワ、福岡（のコンサート）では買わなかったの。

買えばよかったわー。（でも、その後の東京のコンサートで買ったからまあいいの。）

ここでの応援ウチワは買うか買わないかによらず既に話題として取り上げられるだけの存在として認められているのであり、存在している対象に対する行為「買う」の（福岡会場での）不存在を述べているだけであるから、自然な発話である⁹⁾。

9) もちろん、商品としては同じウチワでも個々のウチワは異なるので、今手元にある「正にこのウチワ」のことに言及しているのであれば、存在論的制約が発現して発話は不自然となる。例えばそのウチワがA君の手脂のこびりついた、話者にとっては特別なウチワであるような場合である。

このように、通常の意味での「存在」ではなく、「その発話文の場面における言及可能な対象としての存在」という意味で対象が存在を認められることを「顕在化」と呼びたい。つまり、顕在化している対象には言及できるが、顕在化していない対象には言及できないということである。一方で、動作の存在を述べる文によって顕在化する対象は、(10a)のように同時にその文において言及することができる、ということになる。

5. 結論

以上見てきたように、結局のところ、自然な産生的発話において述べられるのは、その発話が行われる文の場面において自然に顕在化する事物であり、肯定文の場合には発話文と同時に顕在化する事物を含めて自己循環的に事物に言及できる¹⁰⁾のに対し、否定文の場合にはもともとその文とは無関係に顕在化している事物以外は、そもそも言及ができず、また否定文では生起回数・個数が0であるという大原則から回数・個数にも言及ができないということになる。

こうしたメカニズムは、ある意味「当然」のことであり、説明の方法としては「単にそれはできないことである」と述べているにすぎない。しかしそれは人間の認識の仕方としてももちろん「当然」なのであって、それは十分に説明と言えるものと考えられる。むしろ、存在論的制約を無視して単に文要素を結合した「文」を文法的知識によって後付け的に無理やりに解釈しようとするのが奇妙なのであり、自然な文理解という点ではむしろ、自然な文の産出がどのようなメカニズムで起こり、そのためにどのような制約があって、「文法的」制約以外にどのように制限されるのかを解明することが自然な方向であるように思われる。

但し、自然な産生的発話と分析的発話の違いは不明瞭な部分が多く、特に否定表現では「回数・個数が0」と、範囲全体を網羅して述べているのは「分析的な姿勢」であると言えなくもなく、また肯定表現でも産生的に述べた文がそのまま分析的にも用いうるのであるから、こうした心的内容については更に精査すべきである。それでも容認可能性において「自然に容認可能か否か」「自然に発話されるか否か」はある程度判断できるように感じられる。こうした観点から更に久野(1983)で提起された「部分否定文の容認可能性」について調べることも今後の興味深い課題と言える。

10) 先の

(7a) ドナルドがこの卵を産んだ。

のような表現は、「ドナルドが卵を産んだ」という事態を述べると同時に、その事態から顕在化する「卵（ドナルドが産んだもの）」と、それとは別個に存在が認識されている「手元にあるこの卵」とが同一であることをも述べている。この発話はこうした複合的な内容を持っており、この発話によって顕在化した（どの卵であるかが）同定された上で言及される対象「この卵」を、その発話自身に含めているという自己循環的な側面が見られる。

参考文献

- Abbot, Barbara. 1993. A pragmatic account of the definiteness effect in existential sentences. *Journal of Pragmatics* 19, 39–55.
- Abbot, Barbara. 1997. Definiteness and Existentials. *Language* 73, 103–108.
- Barwise, Jon & Robin Cooper. 1981. Generalized quantifiers and natural language. *Linguistics and Philosophy* 4, 159–219.
- Comorovski, Ileana & Klaus von Heusinger (eds.). 2007. *Existence: Semantics and Syntax*. Dordrecht: Springer.
- Dayal, Veneeta. 2004. Number marking and (in)definiteness in kind terms. *Linguistics and Philosophy* 27, 393–450.
- Fox, Danny & Martin Hackl. 2006. The universal density of measurement. *Linguistics and Philosophy* 29, 537–586.
- Francez, Itamar. 2010. Context Dependence and Implicit Arguments in Existentials. *Linguistics and Philosophy* 33, 11–30.
- Freeze, Ray. 1992. Existentials and Other Locatives. *Language* 68, 553–595.
- Hazout, Ilan. 2004. The syntax of existential constructions. *Linguistic Inquiry* 35, 393–430.
- 今仁生美 2010, 「否定の諸相」澤田治美編『語・文と文法カテゴリーの意味』ひつじ書房
- Imani, Ikumi. 2020. Negation. *Handbook of Japanese Semantics and Pragmatics*, Wesley M. Jacobsen and Yukinori Takubo (eds.) De Gruyter Mouton
- Imani, Ikumi. 2023. Polarity of existential sentences with numerals in Japanese. Kishimoto, Sawada and Imani (eds.) (in print)
- 久野嶂 1983, 『新日本文法研究』大修館書店
- Lumsden, Michael. 1988. *Existential sentences: Their structure and meaning*. London: Croom Helm.
- McNally, Louise. 1997. *A semantics for the English existential construction*: Outstanding Dissertations in Linguistics. New York: Garland.
- Milsark, Gary. 1974. Existential sentences in English. MIT: Ph.D. dissertation.
- Milsark, Gary. 1977. Toward an explanation of certain peculiarities of the existential construction in English. *Linguistic Analysis* 3, 1–29.
- Partee, Barbara & Vladimir Borshev. 2007. Existential sentences, BE, and the Genitive of Negation in Russian. In *Existence: Semantics and Syntax*, Comorovski, Ileana & Klaus von Heusinger (eds.), 147–190. Dordrecht: Springer.
- Schwarz, Bernhard & Junko Shimoyama. 2011. Negative Islands and obviation by 'wa' in Japanese degree questions. *Proceedings of SALT 20*, 702–719.
- Solt, Stephanie and Brandon Waldon 2019, Numerals under negation: Empirical findings. *Glossa: a journal of general linguistics* 4(1): 113. pp.1–31
- 宝島格 2014, 「日本語の否定文における違和感の出所について」『名古屋学院大学論集 人文・自然科学篇』第 50 巻第 2 号
- 宝島格・今仁生美 2002, 「計算機による言語理解のための方策」『名古屋学院大学研究年報』15
- 宝島格・今仁生美 2003, 「計算機による言語理解のための方策 2」『名古屋学院大学論集 人文・自然科学篇』第 39 巻第 2 号
- 宝島格・今仁生美 2007a, 「計算機における集合と個体の扱いについて」『名古屋学院大学論集 言語・文化篇』第 18 巻第 2 号
- 宝島格・今仁生美 2007b, 「自然言語における個体存在の多様性」『名古屋学院大学論集 言語・文化篇』第 19 巻第 1 号

- 宝島格・今仁生美2009, 「図形的視点から見た「通す」「通る」の用法」『名古屋学院大学論集 言語・文化篇』第20巻第2号
- 宝島格・今仁生美2012, 「話者の想定から見た「中」と「間」の空間的および時間的用法」『名古屋学院大学論集 言語・文化篇』第23巻第2号
- 宝島格・今仁生美2013a, 「計算機による「中」の扱い」『名古屋学院大学論集 言語・文化篇』第24巻第2号
- 宝島格・今仁生美2013b, 「連続性に関する話者の想定と「通る」「渡る」「越える」の空間的・時間的用法」『名古屋学院大学論集 言語・文化篇』第25巻第1号
- 宝島格・今仁生美2016, 「発話理解における事態の構造化について」『名古屋学院大学論集 言語・文化篇』第27巻第2号
- 宝島格・今仁生美2017, 「自然言語における全体と部分の関係の認識について」『名古屋学院大学論集 言語・文化篇』第28巻第2号
- 宝島格・今仁生美2021, 「予測・推測の様相表現を含む疑問文の容認可能性について」『名古屋学院大学論集 言語・文化篇』第32巻第2号
- Ward, Gregory & Betty Birner. 1995. Definiteness and the English existential. *Language* 71, 722–742.
- Williams, Edwin. 1984. *There*-insertion. *Linguistic Inquiry* 15, 131–153.